2019 | spring | 通巻2号

紀州研 News Letter

文化庁
平成30年度地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業

きのみなと

紀之水門

資料紹介　坂井芳泉画　和歌祭図巻　上・下巻　昭和13年［1938］制作

絹本金泥彩色、巻子。本紙上巻32.4×435.4糎、下巻32.4×439.5糎。紀州経済史文化史研究所蔵。坂井芳泉（1880-1942）が和歌祭を描いた絵巻である。坂井は伊都郡橋本町出身の画家であった。大阪で中川魯月に師事し、四条派の絵画を学んだのち、和歌山市鈴丸に住み、大正から昭和初期にかけて和歌の浦や和歌祭を題材とした作品を多く残している。坂井が描いた和歌祭の絵画は県立博物館や市立博物館でも所蔵されているが、それらはいずれも屏風であり、絵巻として描かれたのは昭和15年［1940］に描いた『和歌雑賀祭図』（和歌山市立博物館蔵）の1巻のみで2巻本の絵巻は本絵巻のみである。本絵巻の和歌祭は、神輿が3基描かれていること、また人物の風俗などから坂井が江戸時代のようすを想像して描いたものと考えられる。坂井が描いた他館所蔵の屏風でも同様のモチーフが採用されており、本絵巻のもととなった作品が存在していた可能性も考えられる。（吉村旭輝）

紀州研
WAKAYAMA UNIVERSITY

研究エッセイ

自著を語る・高揚する民衆運動――異国征伐を選んだ紀州民衆の姿

海津一朗（和歌山大学 教育学部 教授／日本中世史）

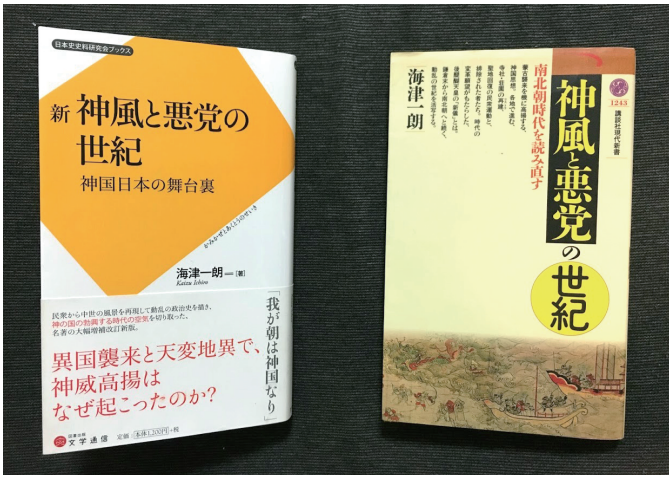
一昨年から初めての新書『神風と悪党の世紀』講談社現代新書の復刊を計画していた。写真の右側の本で、1995年の刊行。表紙にも八幡縁起（神戦）と聖徳太子絵伝（妖星）を配したように、本文中にも多くの図版を盛り込んだ当時として異例の新書だった。講談社のような大手の書店だからこそ保ったのだろう。異国降伏＝対外戦争の時代の空気を再現する、という若き日の意気込みで執筆した書である。当時の歴史学界の気風であった社会史・民衆生活史の研究動向を体現した作品だった。中央の権力闘争や前線兵士の戦闘だけではなく、むしろ地域社会や住民の動きこそ描きたい。本書のテーマとする蒙古襲来（元寇）であれば、博多での彼此軍の戦闘ではなく、鎌倉・京都の政界・政争でもなく、地域の民衆が受けた衝撃を考えたいという切口である。たとえば次のような事件――

「今日諸訴人群集社壇、銭一連各出之、結構御神楽云々、七百人許有之由申之」（『親玄僧正日記』永仁一年十月二十一日条）

鎌倉鶴岡八幡宮では700余名の群衆が100文ずつを供出して御神楽を興行しようとした、というのである。1293年10月の事件である。社頭の御神楽など鎌倉の風流人たちの物好きの趣向か。とんでもない。第３次蒙古襲来の危機が目前に迫り、地震・彗星の天変が続発するなか、首都の都市民衆が異国降伏祈禱という神戦を仕掛けた「戦場風景」であった（新版ｐ49「鎌倉の御神楽」）。日記を書いた親玄は将軍久明の護持僧、つまり鎌倉幕府の神戦の最高責任者。当然ながら首都で起こったこの民衆運動には驚愕したはずだ。この舞台のように、蒙古襲来の世相のもとで神国日本の誕生する時空をさがし求めて再現するのが本書の試みである。

本書の描いた中世の民衆像は対外戦争のもとで支配秩序に絡め獲られていく存在である。当時の学界で「民衆運動」というと、荘家（しょうけ）の一揆から土一揆・惣国一揆へ（つまり個別闘争から広域闘争へ）という地域民衆の成長・抵抗・発展と捉えられた。私の場合は、先に紹介した御神楽事件こそが「民衆運動」の典型、つまり民衆自らが反蒙の戦争を仕掛ける集団熱狂である。この背後には、護持僧ら体制仏教勢力による民衆組織化の草の根教化運動があった（私の研究概念でいう神領興行運動）。もちろん、民衆のなかには「悪党」として差別・抑圧され、それを跳ね返して立ち上がった存在もいた。その末路がいかなるものであったか。今回あらたに増補した最終章「神国紀州の誕生」では、弘法大師の国で起こった民衆運動の真相に挑んでみた。

いま出版界は類を見ない日本中世史ブームで新書・選書が次々と店頭に並ぶ。若手・中堅の堅実な研究が世に受け入れられるのは誠にありがたい。しかし「戦後マルクス史学は民衆蜂起にシンパシーが強すぎる」、「社会史では政治・権力を描けない」などの自己主張はやはり聞き捨てに出来ない。政治権力をめぐり、民衆像をめぐり、社会史の世代が葛藤して闘争してきたものが何か。今ふたたび、世に問いなおしたいという衝動が抑えがたくなってきた。版元の文学通信図書出版と日本史史料研究会には種々の無理難題を承けていただいた。また、寺社縁起や民俗芸能についての紀州研・紀州地域学が、神国日本誕生の画期を考える私には何よりの刺激・支えであった。捨てる神あれば拾う神あり、感謝したい。



（左）『新神風と悪党の世紀―神国日本の舞台裏』文学通信,1200円,2018年刊

歴史の方法としてのライフストーリー

西倉実季（和歌山大学 教育学部 准教授／社会学）

「外見の問題は、語られるべき問題だから」。これは、大学院生の頃に出会った顔にあざのある女性の言葉である。あざは機能障害を伴わず、生命を脅かすわけでもない。しかし、そのままの姿で生きていれば、見ず知らずの他者にじろじろ見られたり無遠慮な質問をされ、次第に外出や人との接触が億劫になっていく。就職にあたっても露骨に差別されたり、「お客様に不快感を与えられないので…」と第三者を口実に辞退を促される。他者からの否定的反応を回避しようとメイクで隠そうとするが、今度は秘密が発覚しないように日常の行動が制限される。顔にあざがある苦しみはこれほどのものなのに、なぜ社会は「たかが外見くらいで」などと過小評価し、「自分の胸の内で解決せよ」と沈黙を強いるのか。こうした痛烈な異議申し立てとの出会いをきっかけに、以来、顔の疾患や外傷がもたらす問題経験を研究テーマにしている。

私が採用したのは、インタビュー調査を通じて人間の生きられた経験を理解するライフストーリー法である。それは第一に、研究対象となる人々の視点に迫ろうとする手法が、顔に疾患や外傷をもつ人々の問題経験――問題を経験している人の苦しみや存在さえもが社会的には認識されておらず、認識されていないことがまさに問題であるような経験――を理解するのに有効だからである。第二に、ライフストーリー法は時間的変遷や経年変化を捉えるのに適しているためである。人間の誕生から現在までというバイオグラフィカルな時間的経過を含むライフストーリーの特性は、問題経験への対処、そしてその対処が生み出す新たな問題経験など、人生という時間を反映した動態的把握を可能にする。

人生という時間に照準する点で、ライフストーリー法は個人の歴史を聞き、叙述する方法として位置づけられる。歴史の方法としてのライフストーリー法には、それがコミュニケーション行為を内包しているという特徴がある。ライフストーリーを得るには、まずは具体的な人と人とが出会い、インタビューという形で直接対面する必要がある。ライフストーリーを聞き取るインタビューは、現在を生きる語り手と聞き手が、語り手の過去の経験をめぐって応答することであり、それはコミュニケーション行為である。

人が語るということは、表情や身振り手振り、言いよどみや沈黙、笑ったり泣いたりといった感情などの身体的次元と分かちがたく結びついている。私がこれまで実施したインタビューでも、たとえば過去に受けた理不尽な仕打ちを語るとき、語り手の気持ちの起伏が激しくなり、当時の感情が現在に呼び起こされることはめずらしくなかった。こうした身体的次元は、文字史料を用いた研究の視野には入りにくいものであり、人と人とが相対する歴史の方法に固有の要素といえるかもしれない。

ライフストーリーの聞き手としての私は、語り手が語ったこと、そして語らなかったことについて、その身体的次元も含めて捉え、差別の体験をどのように受けとめたらよいか試行錯誤を繰り返してきた。必然的に、語り手の語りだけでなく、自分の聞き方とも対峙することになる。何を聞くのか、どのように聞くのか、そもそもなぜ聞くのか。ライフストーリー・インタビューは、聞き手が自分の聞き方を問い直すなかで自らの認識や想像力の限界を突き付けられ、それを何とか更新していこうとする過程をともなう。だからライフストーリーを用いた研究では、聞き手の認識の変化を含めて叙述されることになる。この点も、具体的な人と人とが相対する研究手法ゆえの特徴だろう。

和歌山大学に着任してもうすぐ4年が経とうとしているが、歴史の方法としてのライフストーリー法を「紀州」というフィールドに用いてみることはいまだできていない。温めている（温めすぎた？）テーマはあるので、このエッセイを書く機会をいただいたのをきっかけに、取りかかってみようと考えている。

TwitterやFacebookの
動画もCheck It Out !!

紀伊半島のロギオスたち— λόγιος —
紀州研に所属する研究者（ロギオス λόγιος ）たちの研究を紹介します

明治の頃より、移民として仕事を求めて海を渡った日本人が大勢いました。渡航先は北米、オーストラリア、中南米や南洋地方と多岐にわたります。その中、1908年（明治41）、ブラジルへの日本人移民の送出が開始されています。

東悦子先生（移民研究・英語教育）

当時は、当然のことながら現在のようにインターネットを利用して容易に現地の情報を得ることはできません。では、どのようにして渡航先の情報を得ることができたのでしょうか。当研究所に寄贈された小滝家資料の中から、その手がかりを得ることができます。

当研究所は1,000点を超える小滝徳五郎氏（1889−1972）の旧蔵資料群を蔵しています。小滝は加太町役場勤務を経て、和歌山新報記者となり、県会議員など地方の要職を歴任し、和歌山県海外協会理事も務めています。

膨大な小滝資料の中には35点の移民関係資料が含まれています。その一つが、和歌山県海外移住組合発行の『ブラジル渡航の栞（一）』（1929年）です。同冊子は、目次と本文22頁で構成され、縦横18.7㎝×12.8㎝です。そのサイズと薄さから「栞」と呼ぶのがふさわしい小冊子で、渡航前に準備すべき点について、服装、携行品、荷造りに至るまで、何をどのようにすればよいかを詳細に記述しています。同時代には、商船会社などからも「渡航案内」が出版されており、このような出版物を通して情報が提供されたことがわかります。

移民した人々すべてが、このような印刷物を手にすることができたわけではないでしょう。和歌山県では、渡航した先駆者が故郷に書き送った手紙がきっかけとなり、同郷の人々が北米の同じ地域へ集団的に移民した例もあります。様々な資料を見ていくことによって、歴史の中の人々や出来事が眼前に浮かびあがり、その状況を語ってくれます。

（東　悦子）

和歌山は自然に恵まれ、大小さまざまな干潟があるが、中でも和歌川河口干潟は和歌山市内にありながら面積約35 haと近畿圏最大級である。約300種の干潟生物が生息し、そのうち約40種が絶滅危惧種を含む環境省レッドリスト種に選定されている貴重な干潟である。このように生物相が豊かで、アクセスも容易なので、これまで様々な大学や研究機関、個人研究者、行政により多数の研究が行われてきた。

ハサミ脚を振り上げるシオマネキのオス

私たちが行っているのは生物学の中でも動物の行動学や生態学の研究である。カニやヤドカリの仲間を主な対象とし、配偶者としてのメスを巡るオス間競争や、住み場所としての巣穴や貝殻を巡る闘争、食うものと食われるものの間の相互関係などである。例えば、身体の大きいオスや武器となるハサミ脚の大きいオスが、メスや資源を巡る闘争の際には有利である。巣穴の持ち主である所有者は、それを奪おうとする侵入者よりも戦いによく勝利する。エサとなる生物は捕食者が近くにいることを認知し、そこから回避して生存率を高めようとする、といった専門外の方にも分かりやすい内容である。

県や自然博物館、大学などいくつかの団体により一般市民対象の干潟観察会が年に数回行われており、親子連れで賑わっている。カニやヤドカリ、魚などは子ども達に人気の高い生き物で、動きが面白く見飽きない。まずは干潟に足を運んでみられてはいかがでしょうか。（古賀　庸憲／生物学）

現在私は、湯浅町を事例にした「地方版エリアマネジメント」の導入可能性の調査とその効果について実証検証するために、地域の方と協力しながら研究を進めています。近年注目を集める新しい時代のまちづくりの手法である「エリアマネジメント」が私の研究対象ですが、「民」が中心となって自ら関係する周辺エリアに責任を持ち、「公」が行ってきた分野にも様々な民間の知恵や技術を注入するという特色を持ちます。単なる民間活力の利用ではなく、民が主体となって成果を出す取り組みといえます。

上野美咲先生（地域政策）

町の中心部を熊野古道が通る湯浅町には、昔ながらのまちなみが形成された重要伝統的建造物群保存地区があり、この周辺エリアが今回の調査対象となります。

昨年6月には、エリアマネジメント活動の対象エリア内の受益者から負担金を得る制度として、地域再生エリアマネジメント負担金制度の創設を含む「地域再生法の一部を改正する法律」が制定され、日本国内におけるエリアマネジメント活動の増進が益々期待されています。つまり、地域の特色を活かした画一的ではない「まち」を地域住民が中心となって育む絶好の機会ともいえます。

湯浅町は醤油の発祥地として日本遺産に認定されるなど、世界に誇る歴史や風土・文化が多数存在します。この紀州が誇る湯浅町において「食・農・環境関連産業に重点を置いた観光産業改善地区整備の可能性」に関する研究の動向を是非注目して頂けると幸いに存じます。

（上野　美咲）

経済学部の本庄です。専門分野は組織行動、キャリアで、近年、早期離職の研究を主に行っています。普段は「キャリア・デザイン入門」や「ビジネス・キャリア演習」等の科目を担当し、それ以外の時間は日々、経済学部学習支援オフィス・キャリア支援室で、学生の進路・キャリア相談に乗っています。

本庄麻美子先生（キャリア学）

就職活動の準備には、「自分を知る」ことと同時に「業界や企業を知る」ことが大事になります。特に、企業理解を深める必要があり、情報収集がとても重要となります。大学でもキャリアセンター主催で学内の合同企業説明会が開催されており、直接話を聴くことで有益な情報を得ることができます。また、企業の活動内容や財務状況に加えて、企業の歴史にも目を向ける必要があります。その時に参考になるのが、会社史です。会社の歴史を調べることで、更に企業理解を深めておくことが、就職活動を成功させる秘訣となります。紀州経済史文化史研究所にもいくつかの会社史が所蔵されています。

具体的な会社史について紹介します。阪和興業株式会社の社史です。阪和興業の創業者である北二郎は和歌山大学の前身となる和歌山高等商業学校の卒業生です。1912年に生まれた北は高商卒業後に、大阪税関、安宅商会を経て、1947年に鉄鋼商社の阪和興業を設立しました。偉大な先輩のおひとりです。是非手にとってみていただけたらと思います。

（本庄　麻美子）

イベント報告

第4回 学長杯 かるた大会

紀州経済史文化史研究所と教育学部国語教育専攻との共催で2018年12月22日(土)に第4 回学長杯かるた大会を開催しました。ご参加いただいた近隣の小学生の皆さん、保護者の方々に御礼を申し上げます。

国語教育専攻では、和歌山県内の様々な小学校に赴き、古典に触れる機会が少ない小学生に少しでも日本の古き良き文化を知ってほしいという願いを込めながら、カルタを使って子どもたちに百人一首の授業をしています。また、高等学校や中学校などでも古典に苦手意識を持っている生徒たちが学習に楽しく入り込むことができるよう、本格的な学習・授業の導入として百人一首カルタを取り入れるという取り組みもしています。

ここで使用するカルタは、通常の『百人一首』から20首を抜き出した「百人一首かるたセレクト20」です。また『萬葉集』のなかで紀伊国に関わる20首の歌をセレクトした「わかやま萬葉かるた」(通称:わだにゃんカルタ)も開発しました。

たくさんの子どもたちと関わる事や、実際に教育の現場に立っている先生方と協力して授業を行うことで、いつもは聞けない子供たちの新鮮な反応や先生方が普段の授業で気を付けていることなど、学内の講義にはないたくさんのことを学ぶことが出来ます。どの学校に行ってもいつも刺激をもらえ、私たちにとってとても大切な時間となっています。

和歌山大学 教育学部 国語教育専攻 菊川恵三ゼミ／大橋直義ゼミ 一同

2018年度 紀州経済史文化史研究所 主催 展覧会 一覧

企画展「和歌祭と現代―祭礼のフェスティバル化と再興―」
2018年4月10日[火]~6月1日[金]
総入館者数:376名
図録:無
協力:紀州東照宮　和歌祭保存会

企画展「和歌山高商文書でみる近代日本のあゆみ」
2018年6月27日[水]~8月9日[木]
総入館者数:233名
図録:無
助成:JSPS科研費25870439
[研究代表者:長廣利崇]

企画展「移民と和歌山2018 和歌山の先人たちを通して振り返る移民の軌跡」
2018年9月21日[金]~10月27日[土]
総入館者数:354名
図録:無
協力:那賀移民史懇話会
太地町歴史資料室
後援:(公財)和歌山県国際交流協会
和歌山県中南米交流協会
わかやま南北アメリカ協会
NPO法人日ノ岬・アメリカ村
助成:JSPS科研費18K11777
[研究代表者:東悦子]

企画展「熊野地域の扇踊りと古座獅子」
2018年11月13日[火]~12月14日[金]
総入館者数:37名
図録:無

特別展「加太・友ヶ島の信仰と歴史 ―葛城修験二十八宿の世界―」
2019年1月10日[木]~3月8日[金]
入館者数:238名(前期)
図録:有(16頁)附 別冊解説
協力:加太浦大護摩供顕彰会
吉祥草寺
七宝瀧寺
聖護院門跡
道成寺　他
助成:JSPS科研費18K00318
[研究代表者:大橋直義]

学生企画展「和歌山大学とスポーツ2018」
2019年3月14日[木]~3月28日[木]
図録:無

紀州研
WAKAYAMA UNIVERSITY

Exhibition report

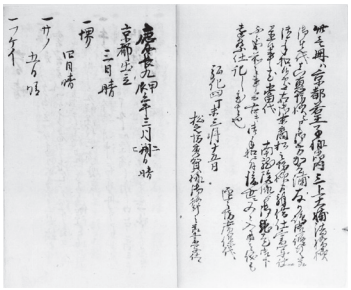
特別展

2018年度 特別展
加太・友ヶ島の信仰と歴史
―葛城修験二十八宿の世界―

葛城山系には『妙法蓮華経』の一品一品が埋め納められた二十八の経塚と、それらをめぐる途上で行者の心身を鍛え、山の持つ力にその身を浸す行場の数々―「葛城二十八宿」をめぐる修験の道のりがあります。和歌山市加太は、その道のりの西端に位置し、第一経塚である序品窟を始め、観念窟・閼伽井跡・深蛇池といった聖地を島内に点在させる友ヶ島の対岸にあたります。その加太にはかつて伽陀寺と呼ばれる寺院があり、その寺の別当を務めた向井家が、現代でも行者たちを迎える「迎之坊」としてその伝統的な役目を継承し続けています。

2019年(平成31年)1月10日(木)から3月8日(金)にかけ、和歌山大学 地域活性化総合センター 紀州経済史文化史研究所2018年度特別展として開催した本展覧会は、このたび紀州研にご寄託いただいた「向井家文書」を大きな軸にすえ、向井家に蔵される貴重な文化財の数々をもお借りし、加太と友ヶ島という地域の信仰とそれを担ってきた人びとの、そして葛城修験の歴史をふりかえろうとしたものです。センター試験等のために開館日が限定的であったにもかかわらず、2月1日(金)の前期展示が終了した時点で、既に238名のご入場をいただいています。また、金曜日ないし土曜特別開館の際に行なっているミュージアムトークにも毎回20名前後のご参加を頂戴し、交通の便に課題を抱える地方国立大学の大学博物館としては、異例とも言える反響に所員一同たいへん驚いています。

本展の展示品で特に注目しておきたいものに触れておきます。**「神変大菩薩御絵像」**一幅(加太向井家蔵〔江戸前期〕制作)は本展の中心的イメージともなった画像です。展覧会図録の表紙に掲載したものですが、例年4月に行なわれる聖護院門跡の葛城入峯修行の折りなどに向井家の床の間に懸けられます。今回は安政三年[1856]に画僧月海が描いた複本を展示しています。



弘化四年[1847]三月十五日写**『加陀友ヶ嶋修行之節御行所始終次第ヲ記し候御手控』**一冊も重要な資料であることが今回新たに分かりました。本書見返しの記述に拠れば、かつて「真恵坊様」が加太・友ヶ島修行を行なった際の手控えをその末裔の「松之坊様」が書写し、それが徳川頼宣のもとに伝来、弘化四年に迎之坊廣保が書写したものであることが分かります。その伝来もさることながら、当初の葛城入峯行は慶長九年[1604]に行なわれたもので、聖護院蔵 慶長十三年写『葛城手日記』(天正十四年[1586]頃に遡る記述もある)に次ぐ資料であることが分かります。とりわけ、具体的な日時・行程・修行の詳細を記した「葛城峯中記」としては現存最古の内容を持つものとして貴重です。

ポスターに使用した友ヶ島での修行風景(閼伽井跡での勤行)も結果的に極めて貴重なものとなりました。紀伊水道を北北西に進み、関西国際空港や紀北・泉州に甚大な被害をもたらした平成30年台風21号の猛烈な風によって、閼伽井跡はもちろん、序品窟が位置する虎島へ渡る飛び石に大変な影響があったためです。その四ヶ月前に行なった本展準備のための友ヶ島修行同行調査が、たいへん残念なことながら、これまでの状況を伝える貴重なものとなってしまいました。

この文章を執筆している2月中旬の段階では未開催ですが、3月9日(土)に和歌山県立博物館 学習室で開催するシンポジウム「葛城修験の信仰・儀礼・言説―向井家文書・聖護院文書のコスモロジーとその四周―」にも注目が集まっています(現段階で当初の定員を大きく超える方のお申し込みがありました)。内容は、小橋勇介(和歌山市立博物館)「向井家文書からみた葛城修験」、長村祥知(京都府京都文化博物館)「聖護院文書にみる葛城嶺修行」、大橋直義(和歌山大学)「『七宝瀧寺縁起』と志一上人のことなど」、大河内智之(和歌山県立博物館)「中津川行者堂碑伝にみる葛城修験の護法善神―深蛇大王と二上権現―」です。このシンポジウムの詳細は『きのみなと』次号でお伝えします。 (大橋直義)

information

2018年度 企画展

紀州経済史文化史研究所
和歌山大学とスポーツ2018

会　　期／2019年3月14日[木]～3月28日[木]
会　　場／和歌山大学 紀州経済史文化史研究所
　　展示室（図書館3階）
入　　場／無料
開館時間／10:30～16:00
休 館 日／土･日･祝日･図書館休館日

和歌山大学では前身である師範学校･高等商業学校の創立以来、さまざまなスポーツが部活動として行なわれ、その成果は「学生表彰」というかたちで顕彰されてきました。2016年度は第23回大学野球関西オールスター5リーグ対抗戦近畿学生野球連盟選抜大会優勝の硬式野球部、関西学生ヨット国公立大学選手権大会国際スナイプ級優勝のヨット部、2015年国民体育大会4位の弓道部など、数多くの学生が受賞し、以後も各部がめざましい活躍をみせています。

本展では、昨年の学生企画展「和歌山大学とスポーツ」に引き続き、伝統あるフィールドホッケー部や弓道部などの歴史を卒業アルバム等で紹介しつつ、近年の活躍を紹介します。和歌山大学とスポーツの歩みの一端を振り返り、学生の活動をあらためて考える機会とします。

（主担当：紀州研ボランティア、吉村旭輝）

2019年度 企画展

紀州経済史文化史研究所
和歌の浦と和歌祭

会　　期／2019年4月9日[木]～5月31日[金]
会　　場／和歌山大学 紀州経済史文化史研究所
　　展示室（ 図書館3 階）
入　　場／無料
開館時間／10:30～16:00
休 館 日／土･日･祝日･図書館休館日

玉津島社絵図并和歌名所　文化8年［1811］再版

和歌の浦は旧紀の川の河口に形成された全国的に見ても類稀な景勝地です。中央には長く突き出した片男波の砂嘴がのび、その内湾には近畿最大級の干潟が広がっています。この景勝地「和歌の浦」は歴史的にみても非常に重要な地でもあり、万葉の時代から聖武天皇をはじめとして多くの歴史上の人物が訪れています。それが評価され、2010年に名勝指定、また2016年には「絶景の宝庫 和歌の浦」として日本遺産認定されました。この景勝地「和歌の浦」は紀伊藩初代藩主徳川頼宣も注目し、東照宮妹背山多宝塔などの多くの文化財を建造しました。その東照宮では1622年から和歌祭が風光明媚な景観をともなった華やかな風流の大祭として今なお行なわれています。

本展では、本研究所がこれまでに蒐集した和歌の浦の関係資料を「景勝地としての和歌の浦」と「和歌祭」の2つのコーナーに分けて公開します。（主担当：吉村旭輝）

■2019年度 紀州経済史文化史研究所 展覧会 予定

企画展「和歌の浦と和歌祭」……2019年4月9日[火]～5月31日[金]
企画展「紀州地域の文化財―館蔵品･寄託品展―」……2019年6月13日[木]～8月2日[金]
企画展「ぶらくりのこれまで･今･これから―紀州のまち探訪―」……2019年8月29日[木]～10月18日[金]
特別展「七宝瀧寺と志一上人―葛城修験二十八宿の世界―」……2019年10月31日[木]～12月20日[金]
企画展「紀伊半島から考える日本史」……2020年1月10日[金]～2月28日[金]
学生企画展「和歌山大学とスポーツ2019」……2020年3月13日[金]～3月27日[金]